

読書のビーイング

奈良　敏行

(笈の定有)

本屋の人間が読書を語る。本屋の人間のビーイング。この一冊の本と関わることで自分はどうのように存在しようとしているのか。本屋の人間はいつも他者に「本」の幸いを届けようとしている。だからいつもなぜこの本を読んでいるのかということを自問自答している。

ビーイング、本を読むことの中に住まう。自分一個の生は、この世の一部しか見えない。他者のもたらす時間と空間の豊かさの中にあってはじめて「この世」が見える。知ることとは他者の存在との出会いによって成立する。この他者が本の中に住まうと信じるのが本屋の人間である。

本屋の人間の読書のビーイング。本を売るといふ日常で多くの本に出会う。わたしの本屋のビーイングは、本の中から言葉を拾い、拾った言葉を生成変化させることだった。本屋の仕事は、言葉を拾い上げて他者に届ける、と狭く考えていたのかもしれない。言葉を拾い上げ生成変化さ

せる、と自分の営みを明確に規定すると、対象となる本は必ずと人文書が多くなる。拾い上げる言葉とは「概念」だからだ。

小説からはあまり言葉が拾い上げられなかった。そこにあるのは概念ではなく情感だからだ。一口で言えない世界の言葉。定有堂教室「読む会」は人文書中心だった。たくさんの言葉を拾えた。その後小説を読む会（読書室ビオトープ）ができて、小説好きの人たちに接するようになった。そこにあるのは人それぞれが推す、それぞれの小説作品だった。小説のビーイングというのだろうか。作者の背丈が反映されたものだった。

「小説がなかなか読めない」と言ったら、「小説って結局は戦後文学に尽きるのではないだろうか」とある人が応じた。テーマとして個人の背丈があり、そしてそこには外部があった。そういう時代の小説は存在論的小説と言つていいのかもしれない。

そんなやりとりのせいか、ふと思いついてこの八月に、佐多稲子『樹影』を読んだ。長崎に原爆が投下され、その三年後に出会う男女の十年にわたる物語だ。ここでは言葉（概念）を拾うことはできなかった。

二人は昭和二十三年に出会う。喫茶店の女主人と店のインテリアを設計する画家という個性的な二人の遭遇だ。わ

たしはこの年に生まれた。父母たちはこのような風景の中に暮らしこのように愛し合ったのかもしれないと思った。古風な愛の物語だ。画家の名を麻田晋といい、女主人の名を柳慶子という。彼女は華僑の子なのだ。

《慶子は、麻田の持つ世界に自分もより一歩近づきたいとおもった。自分を育てることが過去になかったようにさえおもえて、彼女は自意識をひろげている。》

《慶子は、自分がやつとそこに到達したばかりの意識を、そのとおりのようには言葉にし得ないでいた。》

二人の熱情を言葉にできない以上、その愛の深みは日々の情感の揺れの中に沈んでいくしかない。果てしない愛の苦しみが続くのだが、戦後九年目あたりから表面化する、遅れてきた「原子病」がそれぞれに決着をつけ始める。

二人の愛が密室の中で成熟することを許さない外部が、ここには存在する。慶子は日本人として生まれたつもりだったが、外部が華僑だとその存在を規定していく。その声に応じるように喫茶店の片隅に中国語の雑誌を置き始め、愛人に取り残されてからは、同時に「中国書店」も経営する。活動が実る間もなく四十六歳で原子病に追いつかれる。

中国人の多い街の祭りや風景が描かれる。諏訪神社のくち、精霊流しの盆祭り、思案橋、浜町、眼鏡橋、天主堂。

もちろん原爆の投下後の悲惨な街々の風景の残滓も。そして慶子が死ぬ頃にはこれらの痕跡も街の中から消えていくのだった。

言葉を拾うことはできないが、この風景は自分と無関係ではないと思った。そしてたぶんわたしのための風景は現在形の街にはなく、戦後の残影にはじまるこの物語の中にしかないと身にしみるのだった。

小説に言葉を拾うことはできないが、記憶を拾うことができるのだと知った。

2025. 08. 28

佐多稲子『樹影』講談社1972